# 魔法世界グルメ紀行

makinoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法世界グルメ紀行

【Ｎコード】
Ｎ１５６３Ｕ

【作者名】
ｍａｋｉｎｏｋｏ

【あらすじ】
いろいろあって死に、テンプレ通り転生ですね。
・・・神よ暇なのですか？私よりノリノリじゃないですか。
さてさて、結局行く世界は『ネギま！』、体はトリコのニトロ（神によって魔改造）。
やばい、お腹がすいた。・・・トリコの世界にしておくんでした！！！

ウ、ヴゥ・・・・

「ア゛ア゛アアアアアアアアアアアアァァァァァァ！！！！！！」

・・・とりあえず、飯行ってきます。

## 第一話・テンプレですね。

真っ白な空間。

つまりはＴＨＥテンプレな空間。

そこに浮かぶ男がつぶやく。

「テンプレ。」

『テンプレテンプレ。』

それに目の前の老人が返す。

「テンプレ～。」

『テンプレ、テンプーレテンプーレ』

「テンプレ？テンプレテンプレ？」

『テンプーレ、テ・ンプゥレ』

「・・・テンプレぇ。」

『テ・ン・プ・レ？』

カラカラと笑う老人と苦笑する青年。

「・・・そろそろ本題に入りませんか？」

『じゃな。』

「で、結局私は間違いで死んでしまい、あなたはそれに対する詫びとして転生させてやる、と？」

『そうそうお主がドロップキックで助けた子は本来骨折ですんだのじゃよ、よくあるじゃろ？』

「・・・2トントラックに轢かれて？」

『あの子は柔道の天才児だったのじゃ。片腕が折れても受け身くらい余裕じゃ。ちなみに君のおかげで複雑骨折になったの。』

「・・・ですか・・・。」

『まぁ、気を落としなさんな。過去より未来を見つめるんじゃよ。さ、どこか行きたい世界はあるかね？』

「あー、では『トリコ』の世界でニトロになりたいです。あ、あとできれば転生ではなく憑依でお願いします。」

『あー、まだ産まれ方わかっとらんからのぅ。で、チートは何がエエかの？』

「じゃあ、四天王全員の技使いたいです。」

『もちろんちぃとぼでぃじゃな？』

「お願いします。・・・楽しそうですね。」

『いやいやこういうことはいくつになっても楽しいもんじゃわい。カッカッカッカッカッ！！』

「・・・ヒマなんですか？」

『ヒマじゃよ？』

おヒマらしい。

『いやはや神って結構ヒマなんじゃよ。』

「・・・こっちの世界結構物騒ですよ？いいんですか？」

『いいんじゃよ、それも含めて愛しい子らじゃ。それに、神とは常に平等。さっくり言えば善も悪も無いのじゃ。』

「ふむ、なるほど。」

『で、他にはなんかあるかのう！！』

ずいぶん若々しくなってきましたね神よ。つやつやし始めてるじゃないですか。

「え～じゃあ、人間の姿になれる能力と全言語話せるようになりたいです。」

『Xっぽい変身と魔法っぽい変身とどっちがええかの？』

「じゃあ魔法で。」

『む、いっそこのステータスでハリーポッターの世界はどうじゃ？』

「そっちよりもネギまがいいですね。」

『原作ぶれいくとかするんかいの？』

「大筋は壊しませんよ。そうですね、魔法の撃ち合いを見物してパンチラを激写して悪役と主人公を引っ掻き回し、エヴァちゃんをからかうのです。」

『お主、結構おぅぷんな性格じゃな。』

「いえそれほどでも。」

『・・・写真は焼きましてくれんかの？』

「もちろん。ですがどうやって送るので？」

『宛名に神と書いて投函するだけじゃ。切手は５０円のやつじゃ。』

・・・祈りを捧げなくても５０円で届くとはね・・・。

『ふむふむ結構出来てきたのぅ。・・・おぉ！！忘れておった！気と魔力チートと咸卦法と、そういえば楓ちゃんがおったの、いっそ真庭忍法全部入れようかのぉカッカッカッ！！』

「あ、せっかくニトロなんだから魔法とかも食べれるようにしてください。」

『よしきた他には！！』

ノリノリですね神。・・・ホントに若くなってませんか？

「そうですねぇ、時とか止め（て女子風呂を覗き）たいですね。」

『・・・その（）の中を実行しないと誓うならのぅ。』

チッ。こんな時だけ心を読むとはね・・・。

「・・・（葛藤中）・・・誓います。」

『破ったら・・・わかるの？』

「もちろん。」

『ならいいが・・・。』

どうやらパンチラはセーフで覗きはアウトらしい。
ま、こちらもまだ地獄行きは嫌ですしね。

『いや？魂の消滅じゃよ？』

かなりヘヴィだった。

「さて、このくらいでいいでしょう。」

『じゃな、かなり魔改造されたニトロになったの。』

「では私はそろそろ転生したいです。」

『ん、じゃ逝ってらっしゃい。』

シーン・・・。

「あれ？何も起きないじゃないですか？」

『おぉ、踵を三回鳴らすのじゃ！』

「・・・ツッコミませんよ」

『つれないのぅ』

全く。

では、コンコンコン。

足下から光が溢れる。

「生ってきます。」

光に包まれ、視界が真っ白に染まり

またのぉ、とか言う声が聞こえたような————————————

———。

## 第一話・テンプレですね。（後書き）

・・・・やっちまった。

同時連載なんて無茶を・・・・。

## 第二話・お腹がすきました

ピチャアン・・・。

初めに聞いたのは水音。

次に感じたのは体にみなぎる力。

その次に感じたのは、いやまあわかると思うけど、

「ア゛ア゛アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！（腹減ったあぁぁぁぁぁ！！！！！）」

ヤバイヤバイヤバイ！！何だこれ！？この体を貫く焦燥！魂を抉る飢餓！！腹に穴が空いたような、まさになんじゃこりゃあァァ！！な空腹！！！

と、とりあえず状況把握です！！

目の前、崖。人型の穴有り。

周り、森。

上、曇天。ポツポツと雨が降っている。

オッケーわかりました。おそらく目の前の人型の穴に雨が当たり私復活。飛び出してきたというところでしょう。

うん、腹減っていろいろ限界です。

ガサッ

「キシャアアァァ！！」

飛び付いて拳を叩き込む。一撃で頭蓋骨を陥没させそのまま口をガバァと開け食らいつく。

ガブゥブチィぐちゃぐちゃゴクンッジュルジュルングッブヂィバキバキバリバリ・・・・・・。

ゲフゥッ。

ウマかった。

生だとか殺しに対する抵抗だとか一切無かった。

ただ、ウマかった。

だがまだだ。

まだ足りない。全然足りない！！

少し回復した。ここからはソナーを使う！！

カパァッと大口を開け、

「ッーーーーーー！」

っと。

なるほど。これは便利だ。

地形が、川の位置が、そして何より獲物の位置が手に取るようにわかる。

ニィ・・・。

自然、口が凶暴な笑みを作る。

とりあえず。

全部喰おう。

## 第三話・まだまだいけますね。

ガサ、ガサガサ。

ドンッ！！ドシュッ！！

アグッ、ぐちゃ、ぐちゃ、ゴクンッ！ガブッ・・・・・・・・・・。

ゲフゥ・・・。

フゥ・・・まぁ一息つけたかな？

目覚めてから動きまわってイノシシにウサギにヘビ、蜂の巣なんかも食べた。

ちなみに今食べたのはイノシシ。

本日三匹目。

エンカウントと同時にダッシュ、土手っ腹に釘パンチで仕留めます。

イノシシに釘パンチ、ウサギに音弾、ヘビにはフライングフォーク、
蜂の巣は丸ごと口で噛み潰します。
肉の味はワイルドだった。
血の味はマイルドだった。
蜂の巣は甘かった。（サクサクしててパイみたいでした）
（ふむ、だいたい戻ってきたかな？）
先程までカサカサのミイラだった体はだいたい平均的な大人と同じくらいになっていた。
けど確か原作ではコーラを飲んで完全に元に戻っていた。
・・・大量の水分と栄養が要るのかな？
ならとりあえず水ですね。
なにせここはトリコの世界ではないのです。
あそこまで栄養溢れるところではありませんからね。
えーと、ソナーではこっちに・・・あったあった。
河だ。

ひっろ〜い河だ。

グパァと口を開けて首を横に傾けると、そのまま河に突っ込む。

シュゴウ！！ゴッゴッゴツゴッゴッ！！！

おお！！うまい！！

まさに命の水！

カラカラだった体に何かが満ちる！（答え：水分）

ゴッゴッゴッゴボシュッ！！

「ゴェエ！？」

ぐほぁ！！なんか詰まりましたよ！？

「エッエッ！！（ベシャッ）・・・？」

ひょいと喉奥から出てきたソレを拾ってしげしげと眺める。

猿門。

・・・もとい、サケだ。

ふむ、

頭から喰った。

これまたうまい。

なんかこの姿になってから食べるもの全てがうまくて仕方がない。

・・・そう、全てが。

骨ごと食べてふと河を見ると、なんと河底が移動している！

・・・落ち着け私。よく見ろ私。

サケだ。

サケの大群が河をのぼっている！

・・・・・・・・・・。

ラァッキィーーーー！！！

いわゆるアレか、産卵か！

クックックッ、まずは髪の毛よりも細い触手を堅く鋭く槍のように尖らせよう。

無理ですた。

だが諦めない。

やればできる。はず。

こんなときこそ忍法骨肉細工！！

・・・お、おぉ。

できたよ。かなり適当にやったのに・・・自分の才能が恐ろしいぜ。

ついでにドリルのような返しをつけて抜けなくする。

では、改めまして、

「キシャアアァァ！！！」

気合いと共にドリル髪銛（名前考え中）を伸ばして次々にサケの大群に打ち込む。

命中！命中！命中！命中！命中！命中！ハズレ！ハズレ！命中！命中！命中！命中！

ハーハッハッハッハッハー！！
笑いが止まらないですね！
サーモンですよ！お刺身ですよ！新鮮ですよぉ！！
あっ！イクラ！

ガァブガツガツガツ、ングッガブゥプチプチ、
ングップチッ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・。

どのくらい食べましたかね？
１００は越えてるでしょうか。
なにせ河岸が血で真っ赤なうえにあれほどの大群が影も形も無い。

それに血の匂いに誘われたのか狼が何匹か来ました。

もちろん触手で全て捕獲アーンド捕食。

うまうま♪

かなり体も（この体の記憶によれば半分以下だが）好調子だ。

さて、ではそろそろ本日のメインディッシュ。

ここから北に約一キロ。

そちらの獲物に会いに行きましょう。

それにしてもずいぶんたくさんの獲物に会えますね？

小松シェフみたいな才能（アブノーマル）が私にも・・・？

・・・あぁ！

真庭忍法運命崩しですか！！

運命崩し、それはメッチャクチャ運が良くなるという忍法。

どのくらいかというと至近距離からの銃弾が当たらなくなるほど。

これならソナーとか使わなくても、ただ歩くだけで食事にありつける。

・・・つまり、私が真剣に望めばもう二度とあの獲物を喰わなくて済む、ということですね。

ま、細かいことは後です。

あ、細かいと言えば、

「ア゛ッ！！」

グ、グググ、ズボォッ！！！

なんとなくビタミン的なものが足りない気がしたので、近場にあった木を力任せに引っこ抜く。

・・・食べれるとしたら 、

1、木の皮
2、枝の葉
3、根っ子

・・・とりあえず、丸ごといただきます。

ムシャムシャ、メキメキッブチブチ、ゴックン・・・

・・・えー、あまり美味しくない。

ピキュイーン！

木の皮も根っ子もよく煮て食べる。

葉っぱはよく洗い新鮮なうちに食べる。

また種類によっては蒸すのも手である。

・・・い、いったいなんですか今の？

急に思い出しましたよ？

・・・ピーン！！！

あ、そうか！！

私は『転生』ではなく『憑依』したんでした！

ということは今のはこの体の記憶ですね。

あぁびっくりした。

と、そうこうしてるうちに着きましたね。

本日のメインディッシュ。

小山のようなその巨体。

それがのっそりと立ち上がる。

見上げるそれは周りの木をはるかに超える高さだ。

「ガ、ゴアァァァァーーーー！！！」

main dish

～巨大熊の踊り食い～

## 第四話・クマー♪

熊、と言ったら少し語弊があるかもしれない。

立ち上がった高さ２２ｍ。

幅６ｍ。

毛皮ごしにもわかる筋肉。

肩にはトゲ。

黄色い汁の滴る爪。

ニトロ本能が『アレ、ヤバス』と警告を鳴らす。

額には２０？くらいの角。

ちなみに全身赤色。

・・・ふむ、赦亞熊（シャアグマ）と名付けよう。

「ガ、ゴアァァァァーーーー！！！」

ハッハッハッ、活きがいいなぁ。

この私を脅すとはね。

はいせーの、

「ア゛ア゛ア゛アアアアアァァァァァァァァァァ！！！！」

木々に、岩に亀裂が走る。

と同時に赦亞熊の雰囲気が変わる。

ふふん。熊さんの目付きが変わりましたね。

さて、今回は実験です。

四天王技も忍法もなしで、

ただこのニトロボディだけで狩るとしましょう！！

さ～て♪まずは熊さんが角からビームをンのうわぁ！！

とっさに横に跳ぶ。

びっくりしすぎてかなり赦亞熊から離れてしまった。

「ビーム！？え、なしてビーム！？え、熊でしょ？杖無いでしょ！？魔法生物なんですか！？」

「そうだが？」

「キエェアアァァァァァァシャベッタアアァァァァァァ！！！！！」

エ？シャベリマシタヨ？ナンデ？
ということはここは魔法世界？
いやしかしさっきまで食べていたのは普通の地球生物。

・・・断定はできませんがおそらくコイツはハグレのようなものでしょう。

魔法の熊は話せるとはいやはやさすが魔法。

「いやそこまで驚かれてもな・・・俺も驚いてるんだぜ・・・」

熊さんが目を丸くしている。

・・・そんなことはないらしい。

えーと、ということは本来通じない？

いや、あぁそうそう、私は『全ての』言語が理解できるのでした。

ということはさっきの獲物たちも話せたんですかね？

・・・どうでもいいですね。

「・・・で、殺る気満々みたいだが、やるのか？」

「もッちろん死（デス）！！」

結局、どーであろうと、いずれにせよ、

こいつを喰うことには変わりありませんよぉ！！

「オラァッ！！」

まずは真正面から距離を詰める！！

「ハァッ！！」

熊がビームを放つ！

「無駄ァ！！」

そいつは見切った！！

横の木に跳んで躱す。

ベグシャ！！

そのまま足場にして蹴った幹が折れる。

熊まであと１１ｍ！

でそのビーム突然拡散してきた。

どうやら投網のように包みこんだ後集束させるつもりのようだ！！

流石に点ではない面の攻撃は、

・・・あれ？ずいぶんゆっくりですね？

ひょいひょいひょいっと。

懐に飛び込んで、

グイィ・・・っと、

腕を引いてえぇのおぉ！！

「ニトロパンチ（仮）！！！！」

全力の拳を叩き込む！！！！

～熊さんｓｉｄｅ～

目の前にやばい生き物がいる。

なんというかカラスみたいなツラだ。

大きさは人間と同じくらい。

だが放つプレッシャーは絶対的な捕食者のそれ。

久しく感じてない命の危機だ。

「・・・で、殺る気満々見たいだが、やるのか？」

「もッちろん死（デス）！！」

言うが早いか飛び込んできやがった！！！

くそっ！！かなり速い！！

落ち着けまずは迎撃だ！！

「ハァッ！！」

体内の魔力を一点に集中しそれを押し出す！！

ビジュゥウン！！！

が、躱された。

だがここまでは読み通り！！

「ヌぅンッ！」

光線を拡散させ・・・バカな！！！あれをくぐるだと！？

ヤツは既に懐で攻撃しようとしている。

何の変哲もないパンチだ。

だが。

本能的にそれが致命傷クラスの破壊力だとわかる！！

仕方ないっ！！

左腕を盾にして右の毒爪で葬るっ！！

周りがゆっくりになる。

左腕がやけにのろく見える。

ヤツはもう腕を引き終えている。

くそっ早く届け！！

届け届け届け急げっ！！！

うおぉぉぉぉっ！！！！！

なんとかヤツの拳の前に持ってきた！！

よしこれで！！！

ドズンズンッ！！！

「ゴ・・・・ォ・・・・・？」

心臓に響く衝撃。

抜けていく力。

ふと目を落とした左腕は大きく穴が開いていた。

・・・・・ドズゥン！！！

・・・バケモノが・・・・・・・。

～主人公ｓｉｄｅ～

・・・おやぁ？一発で死んだ？

えーっと、あっけなさすぎません？

いや確かにチートボディでしたが・・・。

ま、いいや。

最近深く物事を考えなくなりましたね。

ニトロボディに精神が引っ張られてるのでしょうか？

グギュウゥ～～～～～～・・・・。

・・・とりあえずシーメーで。

## 第四話・クマー♪（後書き）

はいっというわけで！

二話同時投稿です！！

えー、なぜかというとキリが良かったから。

それだけです。

## 第五話・ビーム！！（前書き）

１３，７６８アクセス突破だぜ！！

ご愛読ありがとうございます！！！

## 第五話・ビーム！！

え～、いい加減生で喰うのをやめようかと思います。

と、考えたのは熊さんを半分以上（右腕しかない）食べてからでした。

いや、止めようとはしたんだよ？

ただあんまりにもおいしかったんだから仕方ないでしょう。

滴る血を啜りながら柔らかい肉を喰うのは想像以上に理性が飛ぶものでした。

プッはァ～喰った喰った♪

・・・ハッ！？

みたいな。

一口味見を、なんて考えなければ・・・。

で、です。

現在右腕しか残ってない熊さんの言うことにゃ彼？は魔法生物だったそうな。

だから角からビームを撃てたわけです。

それ見てて私もそろそろ魔法が撃ちたいと思った。

魔法が使えれば料理ができるでしょう。

まずは実験です。

え～この体を巡る力を・・・どうしましょう。

・・・カパァ、コォォ・・・。

「ア゛ァ！！」

ドウンッ！！

・・・おぉ、撃てましたよ。

なんか口に集めて吐いたら光弾が飛び出しました。

光弾はそのまま直進し、そこにあったちょっとした巨木に当たって

（キュボッ！！！

いきなりブクっと膨れ上がって、半径１５ｍくらい（つまり私の嘴のちょい前）を飲み込んだ。

それがこんどはキンッと澄んだ音ともに小さくなる。

・・・えぇ～（汗）。

私は今こんな顔。

←

（；´д｀）

残念ながら鳥顔だからわかりにくい。

目の前は地形が軽く変わっていた。

さっきの光弾を中心に、球体状にキッレ～イに削り取られていた。

樹も岩も地面もなにもかも、だ。

ん？さっき小さくなった光弾がまだあこっち飛んできた！！

脳裏に浮かぶはあの威力。

自分の魔法に殺されてたまるか！！

横に跳んスゲェ曲がってきた！！

やばいやばいやばい今私は空中！

追尾ＡＡＡな光弾は現在目の前！！

ええい、ままよ！！

「カアァァ！！！」

パクッ。

ゴクンッ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・な、何も起きませんね（滝汗）。

よ、よかったぁ～。

その場に倒れ込む。

いまだに心臓がバクバクいってる。

魔法喰い、こんなふうに試すはめになるとは・・・。
うまくいって本当によかった。

で、喉元過ぎれば熱さを忘れる。

さっきの光弾の味が気になる。

ので、

「ア゛ッ、ア゛ッ、ア゛ッ！！」

今度は3連続で発射する。

キュボボボッ！！キキキンッ！！

ヒュヒュンッ！！

パクパクッ！

よし食べれた！

若干焦りながらそれらを口にする。

・・・なんとも言えない、不思議な味ですね。

さっき食べた木のような・・・それとも砂でも舐めたような・・・。

どちらにせよ、なかなかお腹は膨れるようです。

ん？

あと一個はどこです？

フィーン、フィーン、フィーン。

・・・なんです？この音？

最後の一個が自分の周りをぐるぐるとまわっていた。

・・・（；´д`）

・・・・・・これ、こうなるんですか。

あれだけ必死になってたのがアホみたいですね。

気を取り直しまして。

これはこの後どうなるんでしょう？

じーっと見る。

フィーンフィーン・・・。

目が回りますね。少し酔ってきました。これ止まりませんかね？

ピタッ。

止まりました。ふむ、これは私のイメージで動くのでしょうか？

つまんでみる。

シーン・・・。

大きさはビー玉くらいでしょうか、触った感触もそれに似ていますね。

引っ張ってみた。

シーン・・・。

形は変わりませんね。
あんまり力をこめていきなり爆発とかは勘弁して欲しいからここらでやめておきましょう。

嗅いでみた。

無臭。

振ってみた

無音。

舐めてみた。

ごっそり削れた。

ごっそり削れた!?・・・私の魔法喰いは舌にも当たり判定があるのですね。

ふ～む、やはり

・・・いや待てよ?もしかして・・・。

「ッーーー！！」

ソナー使って獲物捜索。

発見！

ダッシュ！！

（普通の）クマさん見っけ！

「アッ！！」

キュボッ、キンッ！ヒュンッ！

パクリ。

おぉ！！やっぱり！

血の味が、肉の味がする！

なるほど、これはいい魔法（？）を手に入れました。

つまりこれは飲み込んだものを圧縮して戻ってくるという代物です。

お腹も膨れるしかなり便利。

では圧縮されたものを元に戻すことはできるのでしょうか？

レッツトライ！！

結論、無理。

いや、白い球体から出すことには成功したんですが、粉々なのです。

まぁ１５ｍもの球体をあれだけ圧縮するのですからある意味当然ですね。

あ、あと口からではなく手の平や触手の先からも撃てました。

連続で。

さて、次はまだ使ってない能力や魔法の練習と行きますか！！

・・・・・・わかってますよ。

・・・現実逃避だって。

そろそろ、自分のしたことを見つめるべきですね。

## 第五話・ビーム！！（後書き）

え～、非常に言いにくいのですが、

諸事情より2週間ほど更新が遅れます。

## 第六話・最初の獲物（前書き）

何とか更新できた！！

次回もいつになるかわかりません！！

・・・後今回人によっては拒否反応を起こすかもしれません。

## 第六話・最初の獲物

・・・・・。

戻ってきました。

人型の穴の空いた崖。

開けた空き地。

つまりは、

私が目覚めた場所。

「・・・ふぅ。」

血の跡。

私が最初に喰い殺した獲物。

私は今お墓を作っています。

といっても骨すらほとんど残ってないのです。

だから私は彼の遺品を集めます。

穴を掘るのは簡単です。

地面を軽く殴り付ける。

はじめは貫通して腕だけが突き刺さったけど、力の加え方を工夫したら2回目はちゃんとクレーターができました。

そこに彼が身に付けていたものを入れていく。

お金だけはもらっていく。

我ながら現金なものです。

あとはさっさと土を被せて埋める。

適当に石を積んでお墓のできあがり。

・・・止められなかった、寝惚けていた、死にそうだった、仕方なかった。

言い訳しようとすればいくらでもできます。

そのどれもか中途半端なものばかりですがね。

結局のところ、私はお腹が空いていたから喰ったのです。

言い訳はしない。謝りもしない。罪悪感もない。忌避感もだ。

・・・どうやら私はもう『私』ではないらしい。

まだ生きている物の捕食。釘パンチ。体からでる無数の触手。肉体改造。超音波。威嚇。怪光線。

息をするように行えた。

『転生』ではなく『憑依』。

つまり今の私は『私』と『ニトロ』が混ざり合ってできた全く新しい私。

そうでなければそんなことできる訳がない。

人にこうもりの羽を付けてさあ翔べと言うようなものだ。

自分に無いものをいきなりもらっても使いこなせる道理はない。

だがニトロはできる。

ニトロの肉体把握能力ならば本能で自分に備わった能力を使いこなせるだろう。

そして人間を食べることにも忌避感など感じないだろう。

つまり私は『私』ではない。

『私』こそが新しい『私』だ。

ふむ、意識したら急に気分が良くなった。

頭の中の霞が晴れたようだ。

そう、『私』はたった今！生まれたのだ。

フ、フフフ、ハーッハハハハハァー！！！

はい、落ち着きました。

一瞬魔王っぽいのになりかけましたがセカンド自分が厨二乙ｗｗｗと笑ってたので戻ってきました。

あ、でも『私』と『ニトロ』が混ざってるのは本当です。

つまり今の私は人間であると同時にニトロでもあるわけです。

だからぶっちゃけ人間喰っても何も思いません。

ま、喰う気もありませんがね。

なぜって？

まぁ人間だった頃で例えるならば、猿を食べたいですか？ということです。

・・・少なくとも私は遠慮したい。

さてさて、彼を喰ったことを謝る気も後悔する気もないですが。

ありがとう。

偽善かもしれないけど、ありがとうと言わせてください。

・・・おや？

誰か来ましたね。

見つかる前にずらかりますか。

メキメキメキィ・・・・。

全身の筋肉が膨張する。

ドンッ！！！

そのまま地面を蹴り、崖を登る。

そして彼は、崖の向こうに消えた。

## 幕間、狩猟日誌・その一（前書き）

・・・すいませんっしたーーーー！！！

でも後悔はしていない。

## 幕間、狩猟日誌・その一

ザッ、ザザッ。

黒いフードを目深に被った5人が森の中を駆ける。

前を走る4人の顔には焦りが見える。

だが一番後ろの男の顔には何も浮かんでいない。

ただ黙々と進んでいる。

先頭の女性が一番後ろの男に声をかける。

「先生！急ぐであります！！早くしないとまた逃げられるであります！」

だが後ろを走る男（声からすると初老ぐらいか）は、

「黙れクソガキ。もう手遅れだろうが少しは静かに走れ。てめぇらの走りは5キロ先のカメだって逃げ出すようなものだ。」

そういう彼の走りは実に無音だった。スルスルスルーと滑るように走っている。

「しかしこうで「それとな。」も？」

ドゴッ！！

「前を向いて走れ。」

哀れ彼女は木に正面から激突した。

それを見た3人は立ち止まり、慌てて助けおこしに戻る。

が、初老の男は振り返りもせずに走り抜けていく。

彼の鼻は感じ取っていた。

血の臭いだ。

それもおびただしい量だ。

彼の名はジョー・ジョーンズ。

魔法世界でハンターをしている。

ほとんど隠者のような生活をしていた。

そんな彼が呼び出されたのは一週間ほど前だ。

なんでも次元が突発的に歪んで魔法世界と旧世界のごく一部の土地が入れ替わったらしい。

なんだそりゃ、というのが彼の感想だ。

だがそれの何が問題なのか。

ひっじょ〜〜〜に運の悪いことにそこはザグリズリーの巣だったのだ。

肉食で気性が荒く非常に凶暴。

毛並みは明るい緑だが、まれに赤色の個体が現れることがあり、その個体は格段に強い。

そんな生物が群れで旧世界に現れたら生態系が崩壊する。

ので早急に討伐隊が組まれた。

彼は魔法生物狩猟の専門家として呼ばれた。

ろくに追跡術すら使えないガキのお守りは面倒だったのではっきりと断った。

が、長年の友人の胃と髪の毛のために受けることにしたのだ。

そして、一週間を費やして巣を発見。罠を用いて殲滅した。

だがそこにリーダーの赤いザグリズリーがいなかった。

どうやらかなりの距離を移動していることがわかり、後始末を本隊に任せ、急いで追跡していたのだ。

赤いザグリズリーは正面から戦ったら並みの魔法使いならばまず勝てない相手だ。

が、ハンターである彼はいわばプロだ。

実際のところ彼一人でも行けたのだが、そこは任務がうんたらメンツがどうたらと付いてきた部隊が彼女たちだ。

やれやれだな、とは彼の談である。

そしてその三日後、彼らは赤いザグリズリーに迫っていた。

（・・・おかしい。）

周りに漂う血の臭いが明らかに多すぎる。

確かにザグリズリーは肉食。進路上に獲物がいれば食い殺すだろう。

（だが、これはまるで・・・ここらの生物を皆殺しにしたような・・・。）

嫌な予感を胸に彼は急いだ。

と、急に森が開け――――――――

そこには血の水溜まりと、僅かな骨、球状にキレイにくりぬかれたクレーターがあった。

周りが随分明るい。

と、思って上を見ると木の半分から上がこれまたキレイに球状に無くなっている。

茫然としていると、残りの四人が追い付いてきた。

「先生！！何か見つけましたか！」

さっき木に激突した彼女、ムー隊長が聞く―（元気なことだ）。

「ああ、ヤツを見つけた。」

「なっ！！ど、どこでありますか！？」

「落ち着けバカタレ。」
ゴチンと彼女の頭に拳骨を落とす。
「っ～～～～～～！！！」
頭を押さえて蹲っている。
そんな彼女達に
「ほれ、そこだ。」
と、その光景を指差す。
「え？なっこれは！？」
ジョーは静かにその光景に足を踏み入れる。
そのままゆっくりと周りを観察する。
「せっ先生、これはいったい・・・？ザグリズリーはどこでありますか？」
ジョーはため息を吐くと、それだそれ、と僅かに残った骨を指差す。

「・・・？どういう意味でありますか？」

「やれやれだな・・・。その骨が赤いザグリズリーのなれの果てだ。」

「こ、これが・・・？」

「おっと不味いな。結界を張れ。戦闘用意だ。不意打ちに備えろよ。」

４人に緊張が走り、背中合わせになるように杖を抜く。

ジョーは無手のままだ。

「・・・どうされたでありますか？」

「こいつはさっき喰われたばかりだ。」

「なぜそう思うでありますか？」

「よく見ろ。ずいぶん口が大きなヤツらしい。唾液がまだ乾いていない。」

確かにジョーの視線の先にはてらてらと光る液体がある。

「・・・いったいどんな生物でありますか？」

「まだ断定はできんが・・・大きさは人と同じくらいでその割に口は大きい、二足歩行、非常に高い知性と強靭な肉体、優れた動体視

力を持つ。」

「なっ！！どうしてそこまでわかるでありますか！？」

「さっきまで雨が降っていた。見ろ、そっちがザグリズリーのだ。そしてそっちが、謎の生物・・・アンノウンのだ。」

そう言われた彼女が見ると、確かにそこには熊の足跡と別の何かの足跡がある。

「その足跡は二足歩行の特徴が出ている。次に信じられないことだが、レッド・ザグリズリーは一撃で葬られている。・・・そんな顔をするな、今説明する。まずこいつの左腕、粉砕され、貫通している。甲の部分から内側に向けてだ。で、こっちの骨片はあばらの骨だが・・・見ろ、これは左胸のあばら骨だ。
で、これらを一撃でやっている。ザグリズリーとアンノウンが立ち回った形跡がないから恐らく瞬殺だ。であそことあそこの線とあと比較的細い線がいくつかあるのがわかるな？あれはザグリズリーが唯一できた抵抗のあとだ。
・・・おそらくアンノウンは最初の光線をかわし、次弾を上に跳び、あそこ、木がへっこんでるだろ？あそこを蹴って接近、そこにザグリズリーは拡散光線を発射、が、これもかわしてザグリズリーの懐に飛び込み何かしらの攻撃を繰り出す。ザグリズリーは防御しようと左腕を出すがそれごと心臓を貫通。で喰われた残骸がそれだ。」

と、ジョーは骨の残骸を指差す。

「・・・見てたんでありますか？」

「状況証拠とそこからくる論理的な推理、あとは経験と勘だ。」

世捨て人の狩人は鋭い眼光で周りを見渡す。

「では、あのクレーターはなんでありますか？」

「わからん。」

「ふえ？」

一瞬呆けるムー。

「俺も初めてみる。だがおそらく魔力による攻撃だ・・・。」

「ではなぜザグリズリーに対して使わなかったのでありますか？」

「・・・パッと思い付く可能性はアンノウンが生まれたばかりの個体だということだ。・・・だが逃げ回ったような跡が・・・しかしあそこで突然止まって・・・？」

彼はぶつぶつ呟きながら足跡を辿る。

「そしてここでいきなり跳躍・・・。」

と同時に自分も跳躍。足跡の深さと長年の勘から地面を蹴った距離と方向を導き、それを追う。

「ま、待つであります！」

いきなり置いてきぼりをくらう面々。

そこから少し離れたところで立ち止まり、辺りを見渡す。

そこは完全に地形が変わっていた。

削り取られた地面、断面が丸い樹、開けた景色にはまともな地面がない。

その光景をざっと見渡すとさらに足跡を追跡する。

「やはりあれは練習の跡・・・ということは生まれたばかりか？・・・・そしてここからゆっくりと移動・・・。」

彼も歩く。その生物の考えをなぞるかのように。

先を進むごとに血の臭いが濃く深く漂ってくる。

だが進めど進めど生き物の気配はない。

と、またも開けた空間に出た。

何かが蘇ったような人型の穴。
そこから続く足跡は血痕を乗り越え森の中に入り込み、自分の後ろからここに戻ってきている。
血の臭い。
だがここは巣ではない。
しばらく歩き回りながらある一点を何度も通っている。
そこには何かを埋めたあと。

「・・・・・・。」

ジョーは無言で近づき、素手でそこを堀り始めた。

「ここに居られましたか！ジョー殿、向こうにおびただしい血の跡がありましたぞ。そこもやはり同じ足跡がありもうした。」

ジョーは穴を掘り返しながら、

「・・・アンノウンのだいたいの情報だ。『体型、大きさ共に人並、ただし筋力はザグリズリーよりも上だ。さらにコイツは動物じゃねぇ、知的生命体だ。
現在ザグリズリーの毒爪で武装している。おまけに正体不明の魔法

を使う。性格は不明、だが喰うことに対して非常に貪欲。森ひとつから生き物が全て消えるレベル』だ。」

ここでジョーは振り向き、

「・・・至急、本国に連絡を入れに戻れ。そして調査隊を編成しここを徹底的に調べろ。とくにこの穴だ。ついでにそこ、誰かの遺品と思われるものが埋まっていた。持ち主の遺族を探せ。」

「なっ！？謎の生物は追わなくていいんでありますか？」

「ここからは俺一人で追う。素人は帰れ。」

「しっしかし自分には任「ザグリズリー討伐任務は完了している。それにこいつは強ぇ、お前らは足手まといだ。」ぐ・・・。」

ジョーはそのまま右手に気を、左手に魔力を出し、

ボッ！！！

手を合わせた途端、ジョーから膨大なエネルギーが溢れる。

ジョーは崖に向かって歩き、前を向いたままこう言った。

「これも伝えろ、『ヤツは人の味を覚えたぞ』とな。」

それを最後に彼は崖を登って行った。

## 幕間、狩猟日誌・その一（後書き）

皆様の感想をお待ちしております。

・・・ていうか感想がほしいですお願いします。

## 第七話・へーんしんっ！！

はいっ、というわけで私です。

えーあのあとダッシュであの場を離れ人里探してはや二時間、見つかりました。

ええ、結構適当に走ってただけなのに普通にレーダーに引っ掛かってくれました。さすが運命崩し、幸運チート。

で。

ちょい離れて観察。

結構大きめの外壁に囲まれた都市。

少しの間眺めてちょっと引っ込み近場にあった湖に移動。

門をくぐる馬車。鎧兜の門番。街道を歩く人々の格好と顔つき。

しばらくながめて結論。

・・・神様、原作よりだいぶ前に送ってくれましたね。

・・・えーおそらく中世くらい？西洋的な顔立ちからここはＮｏｔ日本。

・・・・・・まぁ何はともあれ行くとしますか。

そろそろお腹が空いてきましたから早く街に入りましょう。

ええもちろん攻撃されましたよ。

うっかりしてたんだよ文句あっかゴルァ！（＃`m´）

・・・落ち着きましょう。ついつい地が出てしまいました。

まぁよくよく自分の姿を見てみたら、こんなカラスみたいな顔にたてがみみたいな毛、それに全身にある刺青（忍法狂犬発動）、おまけに筋肉ムッキムキ。あ、あとくちばしの中は歯がぎっしり。

どこの化け物？

まかり間違ってもお友だちにはなれない感じですね。

んーでも確かニトロはたてがみじゃなくて全身を体毛が覆っていたはずですが？

・・・フンッ！！

ファサァ・・・

おぉ・・・生えた。

適当に力込めたら吹き出すように生えましたよ。

かなりテキトーな体ですねニトロボディ。

ああ、この能力を故郷の父さんに送りたい・・・。

ちなみに毛並みはスゲェ綺麗で艶やかな黒。
たぶんこの美(つく)しい髪は四天王から、黒は私が日本人だった名残でしょうか。

あ、そうそう。
どうやら私の体は気や魔力で強化しなくてもチートだということがわかりました。
いやアレですよ力込めただけでふつうに矢も剣も刺さらなくなるんです。

だからどこの化け物？いやむしろどこの超多量筋肉超圧縮硬化生物？
一人称をわっしにすべきでしょうか？
おっと、話が逸れましたね。
さて、どうやって街に行きましょうか。

いえ、確か私は人間に変身できるはずです。

・・・ハァッ！！

さすがに無理ですタ。

行けると思ったんですがねぇ・・・。

んー魔力で・・・体中を覆って、固める感じで、整えて・・・。

うん、できた。

いやはや、ここに来るまで一度も呪文唱えてませんよハッハッハッ（乾いた笑い）。

いやーしかし湖見ながら調節しましたが、これ私の顔ですね。

まさに普通の日本人といった顔立ち、通りを歩けば１０人中１０人が覚えてないと言うような特徴のない顔。

でも髪ツヤと肌ツヤは能力の関係かＳｏグレイトフル。

てか髪長っ！！

あ、あと全身刺青。

あ！ところで全身刺青って一瞬全身刺身に見えません？

見えませんかそうですか。
しっかし全裸はいただけない。

いやさっきの応用で服も作れますね。

オーソドックスにローブでいきますか。

さて、人の姿になって服もきて、やっと街に入れますよ。

さぁいざ行かん！名も知らぬ街よ！

・・・自重します。

## 第七話・へーんしんっ！！（後書き）

俺復活！！

・・・・・・・・（立ったまま死んでいるようだ。）

ハッ！？

一瞬意識が・・・。

えー今回突っ込みどころがあったかもしれないので

質問、人生相談等受け付けております！

でも本当にほしいのは休み・・・。

## 第八話・ハジマリノ街

はいっみなさんコーンニーチハー！

この作品の主人公こと私です！

今私は街の広場でさっき買った肉の塊にかぶりついてるところです。

こう、ブチブチと肉を噛みちぎる度に熱い肉汁と甘辛ソースが飛び散って超うまい。

やっぱり生で貪るのもいいけどグルメ生物としては味があるほうがいいですな。

あ、ちなみに街に入る時なんかあるかな？と思ったんですが、

「お、旅人さん？ならこっち並んでねー、はいここ名前書いてー、で通行税銅貨一枚ねー。」

こんな感じで普通に入れました。

・・・矢まで射かけられたのにアッサリシテルナー。

ところで今日はお祭りでしょうか？

人がたくさんいて何か叫んでいるのですが・・・？

「「「「「「殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！」」」」」」

（ д ；）エェ・・・

そんな私の目に写るのは、分厚い人垣のむこうに、

磔にされた少女だった。

流れる黄金の髪、幼い、だがどこか達観しで辺りを見下ろす少女。

はて？どこかで見たような・・・？

「あの、これはなんの騒ぎですか？」

「あん！？あぁ旅人さんか、魔女だよ魔女！！あの女もう5年もあの姿のままなんだぜ！？しかもアイツ馬車に轢かれた傷がみるみるうちに治ったんだぜ！！化け物だ！！」
「そうだアイツは化け物だ！！」
「殺せ殺せ！」「魔女を殺せ！」「火あぶりにしろ！！」「そうだ火あぶりだ！！」

・・・あ！あぁ～はいはい、キティちゃん？

へぇ～ミスって焼かれた日は今日なのか！

じゃあここからどう逃げ出すか、お手並み拝見と・・・？

・・・あれ？妙ですねぇ？彼女から逃げ出そうとする気概が、いやそれどころか生きようとする意志すら感じられません・・・？

あぁ、生きるのを諦めてますね。
あの濁り、霞み、くすんだ瞳は。

・・・気に入りませんねぇ・・！

いっぺん死んだ私ですらこんなに生きる希望（食べて食べて食べること）に溢れているのに！！

よしっ！！彼女に生きる歓びを思い出してもらいましょう！！！

それに彼女は・・・おっと、それは後にして、

まずは・・・

極細の触手を伸ばし、スルスルと彼女に近づける。

そんでもって彼女の手の平と足を貫く白い杭を引っこ抜く。

ズルッ、ドサッ。

「え・・・」「な！」「・・・は？」「あぁ！」

ふむ、ザワザワしてきましたね。でエヴァンジェリンちゃんは・・・あれま放心してる、と思ったらさすが、もう詠唱に「闇の吹雪！！」・・・うわぁ枯れ葉のように人々が飛んでますね。おやおや皆我先に逃げ出すからひどい混乱に。

私ですか？もう屋根の上ですよ。

んでそのままダッシュで逃走。

大通りを抜けて・・ん？小さな子供が彼女に手を振ってますね。

あ、もう外壁飛び越して外に。いやぁあんな小柄な子がジャンプで壁越えするのは見ててシュールですね。

さて、私も追いますか。

## 第九話・私は正気ですよ？（前書き）

えー、長らくお待たせしました。

今回かなり暴走してます。自己解釈してたりしますので大きな心と生温かい目で読んでください。

## 第九話・私は正気ですよ？

明るい昼下がり。

太陽が暖かい陽射しをさんさんと降らし、心地よい風が少女の頬をくすぐる前にスゴい速さで彼女は駆け抜ける。

街を文字通り飛び越し、森の中に飛び込んでまだ彼女は逃げ続ける。

ヘマをした。

吸血鬼と化して早九十余年。

たまに良心に従うとすぐこれだ。

まぁあのままだと確実に寝覚めの悪いことになっただろうから、もうそれはいい。

しかしそのせいでうっかり処刑されかけるとはな。

まぁ私は不死身なのだがな！ハッハッハッ！！　・・・・ハァ。

・・・・いったいいつまで生きるつもりだろうな、私は。

吸血鬼と化して早九十余年。

ほぼ一世記。

知ってる町も知ってる国も知ってる人も全て無くなった。
今私を知るのは“正義”の魔法使い共のみ。
私を殺すために追ってくる。
今私を知らない奴も私を知れば手のひらを返す。
あの街がいい例だ。・・・あそこには五年もいたのにな。

いつの間にか少女の足は止まっていた。

捕まった時もそうだ。
その気になればあの程度、いくらでも蹴散らせた。（やつらは白木の杭のつもりだったのだろうが、ククク、アレは色を塗っただけの偽物だ。）
そうしなかったのは・・恐らく『今度こそ死ねるかも』などと考えてしまったからだろう。
無意味な希望だ。

彼女は皮肉気に笑い、暖かい陽射しを目を細めて真っ向から見返す。

日の光すらもう私を焼けない。
ましてや魔力すら籠らぬただの焚き火に私が殺せるか。
こんなことになるのなら、あの時とっとと日の中に体を投げ出して、

塵になっておけばよかった。

馬に乗った騎士どもに追い付かれた。
枯れ木のようになぎ倒す。詠唱の必要すらない。

派手にブッ飛ばしたがおそらく生きているだろう。
粉々になったが鎧も着ていたしな。

それにしても、私を殺そうとする者を殺さなくて済むようになったのはいつ頃からだったか・・・。

ガサガサッ！！

茂みが揺れる。
だが何がいるかはわかっている。

ぴょこんっ！と飛び出してきたのは茶色いモフモフの塊、ウサギだ。
とても可愛らしいな。撫でてみたいな。

ちょっと近付いて撫でようとしてみると、私の足下を潜り抜けて駆けていく。

ちょうど街とは反対方向、つまり私が行こうとした方だ。
少し追いかけてみるか。

何の意味もない、強いて言うならちょっとしたイタズラ心で追いか

けることにした。

おぉ！やはり野生の生き物は速いな！！一蹴りであんなに跳ぶなんて！

一蹴りで十メートルも跳んだウサギは、ちょうど茂みに入るところだ。

フフフ、かわい（ガサッバグシャ！！）・・・え？

がぶっブチッグチュグチュブシッびちゃびちゃ。

暖かいものが顔にかかる。

頭が真っ白になる。

コレハナンダ？

カラスのような顔に奇妙な紋様、口の中にびっしり生えた牙は狼を鼻で笑える代物だ。闇を纏っているかのような長い毛皮は微かに蠢いている。例えるなら非常に凶悪な面の烏人間だ。

それはウサギが入ろうとした茂みからいきなり出てきて、あっという間に・・・

グチッ！ングッ、ごっくん。ハァー・・・。

喰った。

私の混乱を他所にソレはゆっくりとコチラを向くと、

「クアアァァァーーーーーーー！！！！」

「ッッ！！」

耳が裂けるかと思った。私が人間なら今ので気絶していただろう。
どうやらコイツは私を喰うつもりのようだ。

ふっ、馬鹿なことを。
私を誰だと思っている？

不死のま（ガヴッ！！）

「ぐ、うあぁぁぁぁぁ！！？」

左肩に走る激痛。

いきなりだ。いきなり姿が消えたと思ったらもう後ろから噛みつかれていた！！
バカな！？反応すら（ギチ、ブチン！！）ッッ！！

「ぐうっ！」

左肩を丸ごと喰い千切られた！！

「ッこのぉ！！」

距離を取るために回し蹴りを繰り出すがアッサリと掴まれ片手で投げ飛ばされた。

体をコウモリに変えて離れたところで元に戻る。

いつもならここから反撃に出るのだが、今回は違った。

「な・・・に・・？」

腕がない。

いや、じわじわと回復はしている。

だがいつもならもうとっくに治っているはずだ。

吸血鬼になってから幾度となく私を助けたあの圧倒的な回復力が・・・ない！？

「クア！？ベッベッ！！」

ソイツの口の中で私の腕が灰になって消える。

普通は千切れた腕もすぐにコウモリになって戻ってくるはずなのだ。

コイツは何かおかしい。コイツに噛まれた所は回復が遅くなった。

コイツに喰われた所は灰と化して消えた。

「ギィ・・・。」

忌々しげなソイツは、今、確かに私の心臓を見た。

コイツは吸血鬼を知っている！？

・・・私は真祖だ。

ニンニクも十字架も効かないし心臓をぶち抜かれても死なない。

白木の杭でも私の動きを封じるのが精一杯だ。

だがコイツは私の回復力をほぼ無くせる。

ならコイツに心臓を喰われたら・・・？

コイツか？

コイツが私の死神なのか？

私はやっと死ねるのか？

コイツに身を任せれば・・・私は解放されるのか？

なら私は・・・

・・・。

・・・・だ。

ボンヤリとした頭にポツリと、ある感情が浮かぶ。

・・・・嫌だ・・・！

ゆっくりと近づいてくる烏人間。

その牙がびっしり生えた口は兎の血でぬらぬらと光っている。

・・・・・死にたくない・・・・・怖い！！！

そうだ。死にたいなんて嘘だ。

本当は生きていたかった。

死にたいならあの時太陽に焼かれればよかった。
さっきだって逃げずにその場所にいればよかったのだ。
いやもっと簡単に私が自分を殺せばよかった。

それをしなかったのは死にたくなかったからだ！！

嫌だったから、怖かったからだ！！自分の存在が消えるというのがたまらなく恐ろしかったからだ！！！

私はもっと――――――――――――

生きていたい！！！

「リク・ラク・ララック・ライラック、来たれ氷精、闇の精！！」

腕が治ると同時に後ろに跳び詠唱を行う。

私に撃てる魔法の中で最高の威力を持つ物だ。

「クアアァァァァァ！！！！」

烏人間も跳びかかってくる。

地面がえぐれるような脚力だがこっちの詠唱のほうが早い！！

「闇を従え吹けよ、常夜の氷雪！『闇の吹雪』ッ！！！！」

少女の手の平に集まった闇と冷気を圧縮した高密度のエネルギーが
極太の光線となって放たれる！！

余波で地面を削りながら進む光線は、

「カアアアアァァァァァ！！！！」

ガバリと開かれた烏の口の中に

「ングッングッングッ！！！」

飲み込まれていった。

そして・・・・

「カアアアアアアア！！！！！」

ゴウゴウと全身からエネルギーを迸らせ見るからに色々ハツラツゥ！！な烏人間が！

バカなッ！！？

私の目の前で非常に非常識な光景が繰り広げられている。

相手に害をなす為の魔法を吸収しただと！？

烏人間はまじまじと自分の手を見つめると、ふいにニィと目を細め、

「クアァ！！」

右手からエネルギー弾を撃ってきた！！

「くっ！！」

それは普通にかわせたが着弾点を見て戦慄する。

エネルギー弾が当たったところは小さく氷の柱が生えてきたからだ。

私の魔法を吸収、発射してきている、魔法は効かんらしいな！！

ならば真祖の脚力に任せて振り切るのみ！！

背を向け、ドグォン！！とおよそ走る時に出すべきでない効果音を残し、逃走に入った少女は、

ステーーン！！！

と足を何かに取られてすっ転んだ！！

戦いの場で転ぶというのはすぐに死に繋がる。

少女はもちろんすぐに立ち上がろうとし――――――――ズルリッ、ズルリッズルズルズルズル！！！

何だこれは！！足が、なにかに引っ張られてるだと！？いやこれは――――――糸？

チラリと少女の視界にウサギの足跡が、否。

十メートルほど引きずられたウサギの跡が映った。

バカか私は！！ウサギが十メートルも跳べるか！！

ということはこいつはもうずっと前からこちらを窺っていたということか！

引きずられていく先には、グパァ・・・と大きな口が待ち構えていた。

指先に何かが掠る、とっさに掴んだのは先ほど吹き飛ばした騎士の剣。

魔法は無理でも剣（コレ）なら！！

腕の筋肉だけで跳び上がり、引きずられた勢いに乗せ空中から斬りかかる！！

キィンッ・・・・。

澄んだ音ともに剣が烏の手刀で真っ二つになった。

どこまでこいつはデタラメなんだ・・・。

今私はこいつに片手で首を掴まれている。

「ククッ・・・。」

もはや笑うしかない。

突然私が笑ったのがおかしいのかヤツは首をかしげている。

その動作が妙に人間臭くてまた私は笑ってしまう。

いまから私は死ぬ。確証はないが何となくそんな気がする。

だがさっきのような焦りはない。むしろ清々しい気分だ。

吸血鬼と化して早九十余年。

ほぼ一世記。

このひと時ほど充実した生を感じたことはない。

だからだろう。

ここまで心が穏やかなのは。

いや、そうだ。どうせもう死ぬなら、今まで使う機会のなかったセリフでも言っておこうか。

私は胸をそらし、大きく笑みを浮かべて言い放った。

「この・・・化け物め。」

「いえ貴女に言われたくないですよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？

## 第十話・つまりこういうことなんですよ。（前書き）

やっと投稿。もちっと更新ペース上げれるようがんばります。

## 第十話・つまりこういうことなんですよ。

はいッ！というわけで、キティちゃんに追い付き追い越し先回りした私です。

ただいま茂みのなかで待ち伏せ中。

え？何故待ち伏せかって？後で説明しますよ。

・・・来た。

接敵まで・・・4・・・3・・・2・！？

立ち止まった？

何をしているのでしょう？相変わらず目スゲェ死んでますけど。

でもそんなところでグズグズしてると、ホラキタヨ。

あぁやっぱり追いつかれ・・て・・・

（。◇。；）ウワァ・・・

（「д」；）ウヘェ・・・

（；´д`）ア～ア・・・

・・・結論。イジメ、カッコワルイ。

圧倒的過ぎでしょう、真祖パゥワー。

鎧着た大人がポーンと飛びましたよ、今。
鎧ベッコベコですよ？
信じられますか？魔法使ってないんですよ、アレ。

やはり格下相手に魔法はなし・・・ですか。

ん～、撃ってくれませんかねぇ、魔法。

いやアレですよ、何だかんだ言って魔法食べてないんですよ。

私のアレは魔法というより遠くにあるものを圧縮して持ってくるだけですからね。純粋な魔法とは違うと思うんですよ。

だからまぁ彼女に全力の魔法をぶちこんでもらおうかと。

つまり彼女は“特殊調理食材”みたいな感じですね。
殺さない程度に脅しかけて魔法を引き出す、これが今回の副目標。
そしてキティちゃんに生きる喜びを教える過程になるわけです。

っと、なんかいますね。

あ！ウサギさんです！・・・小腹も空きましたし、オードブルにいただきますか、ね！！

触手を伸ばして取っ捕まえ、そのまま引き摺り～、

バグシャア！！

ん～！イイ！！美味しい！キチンとした料理もいいですが、やっぱり生もいい！そう！まるで芳醇なワインの詰まった果実のような、そんな感じ。

血に酔ってしまいそうですぅ・・・。

あ、キティちゃんがびっくりしてる。

でわでわ！颯爽と現れて挨拶がわりに威嚇！！

・・・なんか小バカにされた。

しかしめげない！！

あ、そうだ。せっかくですからアレやってみましょう！！

ザ・〇ールド！！時よ止まれ！！！

バアァァーーーーン！！！

・・・おぉ！！スゴいです！！ほんとに全部止まってる！

いくら近づいても無反応ですよキティちゃん。

面白いですねぇ～。

おっと、そろそろ時間っぽいですね。

では後ろに回り込んで、

片腕もらったァ！！！

ガヴッとな！！

「ほふぃへほひふぁふほひはふ。」

6秒、と。おぉ！びっくりしてますね。

暴れられる前に真祖のお味を見ておきます、か！！

ブチィ！！

っと、反撃してきますか！！

しかし甘い！！

ガシッと掴んでポーイ！

んでもって腕もムッシャムッシャ、グハアァ！！！

ぬぁあ！？ペッペッ！は、灰に！？なんで灰？え？コウモリ味（なんだそれ）じゃないんですか？一瞬、「あ、美味しい。」とか思ったのに今じゃ飲み込めない味がします。

思わずキティちゃんの方を向くと向こうも呆然としてます。

・・・あ、服が破けておっぱい見えてる。・・・ツルペタ幼女ハアハア

おっと、そんなこと考えてる場合ではないですね。

ふぅむ、彼女にとってもコレは不測の事態らしいですね。いったい

何故灰に？
・・・仮説としては吸血鬼は魔力によって形成された、生物というより魔法そのものだから、とか？あとは不死身の身体、というか灰を身体の形に保つには魔力が必要、とか？
両方とも私の魔法吸収によって腕の形を保てなくなった？
・・・両方とも当たらずも遠からずなような。

・・・おや？おやおや？
彼女の目が変わりましたね。目の濁りが透き通って光が、いや炎が灯ってます。生きたいという意志の炎です。
あぁ、いいですねぇ。
雰囲気が変わって凄く綺麗に光り輝いて見えます。

フフフ・・・やはり私の前世での経験は間違っていなかった！！！

生きる喜びを知る方法。

それは、二つ。

恐怖と快楽。

私で言えば食の快楽。

前世で言えば、長かった第二次銀河間戦争が終わり、部隊が解散し

て日常に帰ってきた私達。
しかし戦友達は戦場でのＰＴＳＤに苦しまされ、生きる気力を失い、自殺を図ろうとする者まで！
私は何とかするべく何日も専門書を調べ、医者先生に話を聞いてまわりました。
彼らの苦しみを少しでも理解するべく不眠不休飲まず食わずで。
二ヶ月ほど経ってハタと私は答えに辿り着きました！！
生物は恐怖と快楽で生を実感すると！！
（※彼は二ヶ月間不眠不休飲まず食わずです。）
故に私は早速行動に移りました！
幸い彼らが勝手に自殺しないように拉致監禁は済ませていたので、私は死ぬギリギリの拷問と（再生治療カプセルを買いました。）発狂寸前の快楽を（イケナイお薬を買いました。）男女の区別なく行いました。あ、ちなみに私はノンケでも食っちまう男でしたよ？
（※彼は二ヶ月間不眠不休飲まず食わずで天然かつバイセクシュアルです。）
そのおかげか、皆無事に社会復帰を果たし、幸せに暮らしていましたね。
元気かなぁ、ミサトさん、寺田っち、良治くん、河内くん、ズ・グヌンバペペ、大杉さん・・・。
ただ、しばらくの間家が爆破されたり車が突っ込んできたり狙撃さ

れたりしたのですが、アレはなんだったのでしょう？一体どこの組織が何の目的で？結局私がことごとく生き延びたら諦めたらしいのですが・・・迷宮入りですね。

彼は知らない。

彼らは監禁されながら、日に日にやつれ、狂気染みてくる主人公に心の底から震え上がり、それが心配による物だと知って複雑な気持ちになり、一ヶ月越えた辺りでもうやめてくれと叫ぼうとしたが猿轡ででず。

さらに拷問によって「自殺」というワードに反応して全身に激痛が走るという新たなＰＴＳＤを受け、強姦によって深すぎる心の傷を負い、生きる希望というより復讐を糧に社会復帰したということを。

さらにそれを生き延びた彼を被害者全員が結託した殺しに行ってたので今さら訴えられず、断腸の思いで復讐を諦めたということを。

おっといきなり強い魔法ですね！

で～す～が～？

それを待ってたんですよぉ！！

ガバァと口を開け飲み込みます。

あそーれイッキ！イッキ！イッキ！イッキ！

ゴックンっとぉ・・・。

うだるような暑い夏の日、外から帰って一番最初に飲む冷えた麦茶。

冷たく、喉に心地好く、体に活力が満ちるような、あの感覚。

そうつまり

エッネルギィィィィーーーーーーーーーー！！！！！

これが、これが魔法の味ですか！！

美味しい！爽やかで満ち足りてて実に素晴らしい！！こう、表現できないのがもどかしい、不思議な味！！

そしてこの感じ・・・。

試してみますか♪

せいっ！！

・・・うわぁお、冷凍ビーム撃っちゃった。

キティちゃんも目を真ん丸にしてますね。

おぉっと！逃がしませんよ？　ていうか幼女がそんな音出して駆け

てはいけません！！

ツルのムチ！！

足引っかけてぇ！引っ張る！！

（▽ー；）アッ！

全く意識してなかったけど私いま幼女ペロペロしてる。柔らかいなぁ・・・ハッ！

ち、違いますよ？私は紳士ですよ？

と、ともかく！ズルズルズルゥーッと引き摺ってウオォッと！！？

いつのまに剣を！？

ええい、ままよ！！

断・罪・円！！

・・・ふぅ、うまくいきましたね。

さぁ、キティちゃんをひょいと持ち上げます。

軽くてぷにぷにして・・・ハァハァ。あぁもうヤベェ可愛いぜ！もう頬擦りしまくりてぇ！

おや？随分楽しそうに笑ってますね？

ん？おや？無い胸を張って何か言おうとしてますね。

「この・・・化け物め。」
「いえ貴女に言われたくないですよ。」

・・・・・ヤッベェ、シャベッチッタ！！

## 第十一話・グダグダも悪くないです。（前書き）

今回ちょっと短め。

## 第十一話・グダグダも悪くないです。

今晩日早うございます

私です。

みなさん馬刺は食べたことがありますか？

私は前世では食べる機会がなかったので「・・・イ。」すが、今回めでたく、初めて食べることができました！

追手の乗ってきた馬なんですが、いや～これが美味しいんですな。

若干肉「オイ！」固めかなっとも思うのですがソコはソレ。

素材の味を楽しみます。

あ、でも惜しむらくはさっきの街「オイッて！」で食材や調味料を買ってなかったところですね。

やはりそろそろ料理を「いい加減にしろ！！」

かじりついていた馬の腹から口を離して飛んできたサギタ・マギカをパクン。

・・・・・ピーナッツ味、だと？

・・・気にしない方向で。

「さっきから話しかけているのにバクバク馬ばっか食いおって！！いったい何頭食う気だ！いや、いらん！！なんだその『いる？』みたいなアピールは！？いいから話を聞かんか！」

エターナルな幼女が何か言ってますね。

やれやれ、相手をしてやりますか。

「全く、食事中に話しかけるのはマナー違反ですよ。」

ついうっかりポロッと喋ってしまったあの後。

なんとなく気まずくなった私は驚愕してるキティちゃんを降ろして近くにいたお馬さんにダイブ。十秒くらいで完食。次にダイブ。食べる。ダイブ。食

べる。ダイブ。食べる。細かいことがどうでもよくなる。ダイブ。キティちゃん正気に戻る。食べる。冒頭へ。

「で？結局貴様は何なのだ？」

は？

「何なのだ？と聞かれても・・・私は私ですよ？」

「ッ！・・・そうじゃない、私は百年ほど生きたが貴様のような生き物は見たことがないぞ？」

あ！あ～はいはいそう言うことですか。

ふぅむ、しかし百歳？ってことは原作開始５００年前ですか。

これまた随分と遠いことで。

「ん～私はホラ、アレですよ、森の妖精さん。」

・・・アレ？青筋浮かべてらっしゃる。

「・・・ほ～、最近の妖精はずいぶんと発育がいいなぁ？」

「親父臭い台詞ですね。・・・いやぁ～ん、アタシィ、エッチな目で見られてるよォ。（チラッ」

しなを作って言って見る。声の調子は骨肉細工でソレっぽく声帯を改造。

プルプル震えてますね（笑）

「・・ケンカ売ってるのか？」

「やぁだ本気にしないでよぉん、いくら自分が残念な子供体型でぇ、変態にしかモテないからって嫉妬はやめてほしぃわぁん？」

「ブッコロス！！！」

〈〈しばらくお待ちください。〉〉

ふふん、バカめ。

デザートに魔法食べるためにちょっと挑発しましたがしっかり引っ掛かってくれました。

途中で体術に切り替えられましたがソコはソレ。
チートボディと軍経験は伊達ではありません。

ただいまキティちゃんは私の髪で作ったロープで亀甲しばゲフンゲフン・・・もとい、スマキにして転がしてあります。

ちょっとふんぞり返ります。エッヘン。

「ハッハッハたかが百年生きただけの幼女がアラサー（アラウンドサウザンド）の私に勝てるものですか！！」

あ、ちなみに私の年齢は前世とこの体の年齢を足すと１０６７歳です。

サイボーグ手術をしてましから享年５１２歳でした。

・・・ホントなんで私トラックなんかで死んだのでしょう？ゼロニウム合金製の体がなぜ？直前にあった連続ロボット破壊犯との戦闘が原因でしょうか？

「おのれぇ～・・・！」

おっと、キティちゃんにかまってあげないと。
魔力切れになるまで撃ちまくったからグッタリしてます。
でもこちらを睨む目はさっきと違っていい色です。
いいね、やっぱりエヴァちゃんは目がキレイだ。

「やれやれ弱っちぃですねぇ。それでも真祖ですか？」
「クッ！！本当に貴様は何なのだ！？」
「えーと森の「それはもういい！」・・くまさん。」
ちょっと上目遣いに。
「なにぃ！・・・（可愛いじゃないか）」

グダグダと時間は過ぎていく――――――――

## 第十二話・私の名前は・・・。

キングクリムゾン！！！

結果だけがエ？あ、ダメすかそっすか。

はいどうも、全てをすっ飛ばしたい私です。

ただいまスマキにしたキティちゃんが上目遣いに睨み付けてきてます。

「で、結局貴様はどういった存在なのだ？」

亀甲縛りでも偉そうってどうなんでしょう？

可愛いから構いませんが。

「ふぅむ、敢えて言うなら、徒(ただ)で単なる“生き物”です。」

「貴様・・・まだ私を愚弄するか。」

「えー、マジに答えたのになにこの仕打ち。ちょっと傷つきましたよ。」

「アホか！！どこの世界に真祖と正面から戦って勝ち、魔法を食らって素手で剣を真っ二つにする“ただの生き物”がいる！！？」

「ほらココこの通りこのようにご覧の通り貴女の目の前に。」

「チッ！！・・・ならば貴様の名前は？まさか名無しか！？」

「え、いいえ？しかし私には７２通りの名前が在りますからねぇ、最初は確か・・・・・イーいやコレじゃない。」

ドッグタグ３６枚に別々のコードネーム、偽名２１個、死んだフリして戸籍を変えること１４回。

だから最初は・・・いや、私はあの名前を捨てたのでした。そう、あの時に・・・。

仕方ない、ニトロ君、君の名前は？え？初登場なのに名前だけはヤだ？雰囲気ある幕間で名乗りたい？

・・・気持ちは分かりますからねぇ、強く言えませんね。

やれやれ、んー、えーと、ふーむ。ヨシッ！決めました。

「“ライフ”。そう呼んでください。」

「偽名か。」

「いえ、これからはコレが本名です。」

「フン、まぁいい。それで？なぜ私を喰らうのをやめた？」

「不味いからに決まってるでしょう？」

「・・・そうか。ならばどうやって魔法を喰った？」

「美味しくてついゴクンと。」

「・・・・・・そうか。」

おや？何か『もうやだコイツ』という顔をしてますね。

「・・・一応聞いとくが、私を引きずった糸と素手で剣を二つにしたのはどうやったのだ？」

「根性で適当に。」

「・・・・・・・・・ハハハそうか。そういうこともあるよな、うん。」

おやおや？目が虚ろですよ？どうしたんです？

っと、なんか来ましたね。気配を消してこっそり近づいてきてるつもりでしょうが生憎私の耳レーダーは優秀です。

「――――っ。」

小さくソナーを展開。

８時の方向、距離６メートル、そこの茂みの陰、大きさ４０センチ

くらい？ずいぶんと小さい。獲物は・・・体に対してはかなり大きな剣ですね。あとはナイフが片手に二本。

敵意は・・・感じられませんね。こちらを、というより私を警戒してますね。

そして命は感じれど生体反応は皆無。

となれば、

「出てきてはどうです？」

しばし無反応。

「・・・チッ。」

舌打ちと共に茂みから飛び出してくる影。

その小さな身の丈に合わない剣をこちらに全力で降り下ろしてくる！！

だがこちらとしては止まって見える。

「甘いで――しまった！」

余裕で白羽取りしてみせるが勢いが全くないことに気づく。

がっしり捕まれた剣を足場に人形が私の後ろに、エヴァンジェリンのもとに飛ぶ振り返ろうとした私の目にナイフを二本とも投擲。

片手で振り払うがその時には既に――――――

「チャチャゼロ！」

「ヨウゴ主人、ズイブンエロイ格好ダナ。」

空中で新しいナイフ（どっから出した）を抜き、私の触手ロープを切る。

スタッと着地し立ち上がったエヴァンジェリンの隣に並ぶ。

「マタセタナ！！」

不死の魔法使いの従者、殺戮人形（キリングドール）チャチャゼロが颯爽と登場した。

## 第十二話・私の名前は・・・。（後書き）

・・・たまに、キャラが勝手にストーリーに乱入していくことがある。

チャチャゼロ、出ないはずだったのに・・・？

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1563u/

魔法世界グルメ紀行

2011年9月30日19時31分発行